

[B年] 聖霊降臨節第5主日(2026年6月17日)**【旧約聖書日課】アモス書 7章10～15節**

¹⁰ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。¹¹アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。』

イスラエルは、必ず捕らえられて
その土地から連れ去られる。』」

¹²アマツヤはアモスに言った。「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。¹³だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」¹⁴アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。

¹⁵主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。

【使徒書日課】使徒言行録 13章1～12節

¹アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったmanaエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。²彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」³そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

⁴聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、⁵サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。⁶島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。⁷この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。⁸魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。⁹パウロと

と呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、¹⁰言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。¹¹今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。¹²総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

【福音書日課】マルコによる福音書 6章1～13節

¹イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。²安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。³この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。⁴イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。⁵そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことができにならなかった。⁶そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。⁷そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、⁸旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、⁹ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。¹⁰また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。¹¹しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさない。」¹²十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。¹³そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

アモス書 7章10～15節

10それからベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家のただ中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられませぬ。」

11アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣によって死ぬ。

イスラエルは必ず捕らえられて

その土地から捕囚として連れ去られる。』」

12アマツヤはアモスに言った。

「予見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこでパンを食べ、そこで預言するがよい。13だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」14それに対してアモスはアマツヤに言った。「私は預言者ではなく、預言者の弟子でもない。私は家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」

15主が羊の群れを追っている私を取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と私に言われた。

使徒言行録 13章1～12節

1さて、アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデの幼なじみ〔別訳→乳兄弟〕マナエン、サウロなど、預言者や教師たちがいた。2彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロを私のために選び出しなさい。私が前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」3そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

4聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、5サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。6島全体を巡ってパフォスまで来ると、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスと言う偽預言者に出会った。7この男は、総督セルギウス・パウルスという賢明な人物のもとにいた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞くとした。8魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、総督をこの信仰から遠ざけようとした。9パウロとも

呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、10言った。「ああ、あらゆる偽りと不正に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。11今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、誰か手を引いてくれる人を探した。12総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

マルコによる福音書 6章1～13節

1イエスはそこを去って、故郷にお帰りになった。弟子たちも従った。2安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人の授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡は、一体何か。3この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで私たちと一緒に住んでいるではないか。」こうして、人々はイエスにつまずいた。4イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親族、家族の間だけである。」5そこでは、ごく僅かの病人に手を置いて癒されたほかは、何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6そして、人々の不信仰に驚かれた。それから、イエスは、近くの村を教えて回られた。

7イエスは、十二人を呼び寄せ、二人ずつ遣わすことにされた。その際、汚れた霊を追い出す権能を授け、8次のように命じられた。旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金〔直訳→銅貨〕も持たず、9ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と。10また、こう言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から出て行くまでは、そこにとどまりなさい。11あなたがたを受け入れず、あなたがたに耳を傾けようとしぬ所があれば、そこを出て行くとき、彼らへの抗議のしるしに〔直訳→証しとして〕足の埃を払い落とさなさい。」12十二人は出て行って、悔い改めを宣べ伝えた。13また、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒した。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

- ・6月21日「聖霊降臨節第5主日」の日課主題は「宣教への派遣」。
- ・旧約日課は、「アモス書」から、アモスが祭司アマツヤと対話したとされる箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、アンティオキア教会がバルナバを宣教団として派遣したことを伝える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスが故郷に帰られた後に十二人を派遣されたことを伝える箇所。

旧約日課(アモス7章より)

- ・「アモス書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第四巻「小預言者ら」に第三の預言者として置かれた預言文書。標題(1:1)によれば、前8世紀中葉、全盛期を誇ったヤロブアム王治世下の北王国イスラエルに対して預言活動を行った「アモス」の預言集、またその活動記録として編纂されている。
- ・「アモス」は、「テコアの牧者の一人」という出自で紹介されており、多くの預言者の場合に用いられる「○の子○○」という表示がされていない。おそらく彼は、多くの預言者の場合のような祭司家系の者ではなく、「牧者(ノーケード)」と呼ばれる「遊牧部族」の首長一族の一員であったと推認される(「ノーケード」は、王下3:4で「モアブの王メシャ」を称する用語として「羊を飼育する者」と訳されている)。「テコア」は南王国ユダの領域内、ヘブロンに近い地であり、彼は、この地域を拠点にした、あるいは防衛配備された「遊牧部族」に属していたのだろう。おそらく直接の主君は「ユダ王国ウジヤ王」であったと考えられるが、当時の南王国ユダは北王国イスラエルの事実上の属国であったので、「イスラエル王国ヤロブアム王」が事実上の主君であったとも考えられる。本書で「アモス」は、「イスラエル」や「ユダ」の裁きを告げ、日課箇所では「ヤロブアム王」の殺害を預言しているが、本預言書で一貫して責めを受けているのは、イスラエルやユダの世俗的王権ではなく、「ベテル」や「ギルガル」など聖所の宗教的権力集団である。
- ・「ベテル」や「ギルガル」などイスラエル各地の「地方聖所」は、前9世紀の北王国でオムリ王朝を打倒して建てられたイェフ王朝(前842~746年頃)が「バアルの祭司・預言者」に代わって権力維持の拠り所とした宗教集団と考えられる。「ベテル」や「ギルガル」の祭司集団は、北王国の王権と一体化して栄華に浴し、その影響力は南王国ユダにまで及んでいたとさえ推認される。預言者「アモス」は、おそらく南王国の国家神殿である「エルサレム」の祭司団の意を受けて、「ベテル」や「ギルガル」の祭司集団が両王国で貪っている権力や富の問題を告発し、両王国の王にそれら地方聖所祭司集団を排除させる目的で、預言活動を展開していたのだろう。
- ・アモスの預言にもかかわらず、「ヤロブアム」王が暗殺されたという記録は、「聖書」からは知られない。また「イスラエル」がアッシリアに滅ぼされ、王族が捕囚されるのは、ヤロブアムの死後24年後である。

使徒書日課(使徒13章より)

- ・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」を語る歴史物語文書。概説は資料「聖書と祈りの会 260520」を参照。
- ・日課箇所は、シリア・アンティオキアに形成されていた教会共同体が、バルナバを宣教派遣したことを伝える箇所。アンティオキアの教会共同体の成立については、11:19~30で物語られている。それによると、エルサレムで「使徒たちの教会」として始まった原始教会が当初の「ヘブライ語を話すユダヤ人(ヘブライオイ)」の集団にとどまらず、「ギリシア語を話すユダヤ人(ヘレニスタイ)」を迎え入れたことで生じた内部対立(6:1~6)の結果惹き起こされた「ステファノ事件」(6:8~7章)をきっかけに、エルサレムを去った信者らがそれぞれの居住地に帰って行ったが、アンティオキアに行った者たちは、彼ら自身で同地における宣教活動を始めるに至っていた。その活動を知ったエルサレムの「教会共同体」が、関係を維持し、自分たちの指導のもとにアンティオキアの「教会共同体」を組織するために、使徒の名代として派遣されたのが「バルナバ」であり、バルナバに見出されて迎えられた「サウロ」であった。同様の経緯で「教会共同体」が形成された例は本書で取り上げられていないだけで多数あったと推認される。アンティオキア教会が他の地の「教会共同体」と一線を画すように取り上げられているのは、この教会が後にペトロら使徒集団と共に諸教会のネットワーク形成に重要な役割を果たすことになる「パウロ=サウロ」を宣教者として派遣し、その権威を保証し続ける母体となっていくからだろう。古代教会で彼ら教会共同体に属する者たちが「キリスト者(クリスティアノス)」と呼ばれるようになった始まりもこのアンティオキアでのことであったとされており(11:26)、初期教会時代に主導的な役割を果たした教会共同体であったことが強調されている。
- ・5節「ヨハネ」は「マルコと呼ばれていたヨハネ」(12:12,25、15:37)と同定され、パウロは「バルナバのいとこ」(コロ4:10)としている。本書で、彼はその行動が問題とされてパウロが宣教旅行への同行を拒否した人物として描かれるが(15:37~41)、パウロ書簡では良き協力者として紹介されている。
- ・6節「バルイエス」は「イエスの子」の意。この魔術師は8節では「エリマ」とされており、「バルイエス」の名は彼が「イエスの弟子」を名乗っていたことを示唆。
- ・9節で「サウロ」が「パウロ」の別名であることを示すと、本書は以後、一貫して「パウロ」の名で物語を続ける。「サウロ」はユダヤ人としてのヘブライ語名であり、「パウロ」はギリシア語で生活する上で用いていたギリシア語名。当時のディアスポラのユダヤ人の多くは、このように複数の名を使い分けていたが、特に「パウロ」はローマ市民権を生まれながら与えられている家系の出自であり、ユダヤ人の名「サウロ」と共にローマ人の名「パウロ(パウルス)」を生誕時に命名されていたと考えられる。通俗的な理解では、ユダヤ人サウロがキリスト者として回心したことを機にパウロに改名したと説明されることがあるが、そのようなことを示唆する記述は、本書にもパウロ書簡にも無い。

福音書日課(マルコ 6 章より)

・日課箇所は、主イエスが故郷に帰られたおりの逸話箇所と、十二人の弟子を二人一組で派遣したことを伝える箇所。それぞれ、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「マタイ」や「ルカ」は異なる文脈にそれぞれの箇所を配置している。

・前半(1~6 節)の主イエスが故郷に帰られた折の逸話は、「マタイ」と「マルコ」がほぼ同じ内容で伝えているのに対して、「ルカ」は状況描写や発言などを詳細に展開させ、より具体的に描いている。また、「ルカ」はこの場面を、いまだ弟子たちを従わせられる前のこととして設定している。

・主イエスの「故郷」(1 節)は、ここでは明示されていないが、「ナザレ」であることがすでに示されていた(1:9)。主イエスが「ナザレのイエス」と呼ばれていたことは、四福音書および「使徒言行録」で繰り返し伝えられている(マルコ 1:24、10:47、14:67、16:6)。ただし、「ナザレ」の地理的位置は考古学的に同定されていない。一説には、「ナザレのイエス」は「ナジル人のイエス」を意味したとも考えられている。「ナジル人」は「民数記」6 章に規定された禁欲誓願者の呼称で、「士師サムソン」が良く知られている。「洗礼者ヨハネ」の人物描写は「ナジル人」を想起させるものであり、「ヨハネ」の後継者とみなされた主イエスが「ナジル人」と呼ばれた可能性はあり得る。ただし、主イエスは「ナジル人」に求められるような禁欲生活を守られていない。

・5 節に主イエスの家族についての情報が記されている。兄弟たちの内、少なくとも「ヤコブ」と「ヨセ(ヨセフ?)」は、ある段階で主イエスの弟子集団に同道するようになったと考えられる。パウロは、書簡の中で「主の兄弟ヤコブ」(ガラ 1:19)に言及している。

・後半(7~12 節)で伝えられる「十二人の派遣」は、「マルコ」と「ルカ」がほぼ同様に伝えているが、「マタイ」は大幅に拡大している。「マタイ」がすでに初代教会における「弟子(使徒)たちの責務」を視野に入れて主イエスの教えを伝えようとしているためだろう。他方で「ルカ」は、同様の内容を「七十二人の派遣」としても伝えており(ルカ 10:1 以下)、「宣教派遣」という営みそのものに強い関心を示していることが分かる。「マルコ」は、公生涯時代の弟子たちの働きを伝えることには控え目であり、彼らが主イエスに倣うためにまず従うようになることに関心を向けている。

来週の誕生日 (6 月 21 日~27 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-355「主をほめよ わが心」(= I 76 歌詞)は、19-20 世紀英国の医師ブリッジズの作詞とされているが、原詞は英語ジュネーブ詩編歌集に収められたウィリアム・キース作の詩編 104 のパラフレーズ。曲は、J.M. ハイドン。

・21-345「聖霊の力にあふれ」は、20 世紀英国教会司祭ピーシーの作詞に、同じく英国教会司祭で王立音楽学校チャプレンのテイラーの曲が付されている。ピーシーの創作活動は最晩年。

・21-401「しもべらよ、み声きけ」(= I 224)は、C.ウエスレーの作詞。「讃美歌 21」では原歌詞に即して全面的に改訳されている。曲は、ドイツ民謡から取られてカトリック聖歌集(1765 年版)で用いられるようになったものを転用。

21-355「主をほめよ わが心」

My Soul, Praise the Lord!

1. My soul, praise the Lord! / O God, Thou art great: / In fathomless works / Thyself Thou dost hide. / Before Thy dark wisdom / And power uncreate, / Man's mind, that dare praise Thee, / In fear must abide.
2. This earth where we dwell, / That journeys in space, / With air as a robe / Thou wrappest around: / Her countries she turneth / To greet the sun's face, / Then plungeth to slumber / In darkness profound.
3. All seemeth so sure, / Yet nought doth remain: / Unending their change / Obeys Thy decree. / The valleys of ocean / Stand up a dry plain, / Thou whelmeest the mountains / Beneath the deep sea.
4. The clouds gather rain / And melt o'er the land, / Then back to the sun / Are drawn by His shine: / Whereby the corn springeth / Through toil of man's hand, / And vineyards that gladden / His heart with good wine.
5. All beasts of the field / Rejoice in their life; / Among the tall trees / Are light birds on wing: / With strains of their music / The woodlands are rife; / They nest in thick branches / And welcome sweet spring.
6. Lo, there is Thy sea, / Whose bosom below / With creatures doth teem, / Scaled fishes and finned. / Above, the ships laden / With merchandise go, / Nor fear the wild waters, / Nor rage of rude wind.
7. O God, Thou art great! / No greatness I see, / Except Thee alone, / Thy praise to record. / On all Thy works musing / My pleasure shall be; / My joy shall be singing: / My soul, praise the Lord!

21-345「聖霊の力にあふれ」

Filled with the Spirit's Power

1. Filled with the Spirit's power, with one accord / the infant church confessed its risen Lord. / O Holy Spirit, in the church today / again your power of fellowship display.
2. Now with the mind of Christ set us on fire, / that unity may be our great desire. / Give joy and peace, give faith to hear your call, / and readiness in each to work for all.
3. Widen our love, good Spirit, to embrace / the people of all lands and every race. / Like wind and fire, with life among us move, / till we are known as Christ's and Christians prove.

21-401「しもべらよ、み声きけ」

Ye Servants of God, Your Master Proclaim

1. You servants of God, your Master proclaim, / and publish abroad his wonderful name; / the name all-victorious of Jesus extol; / his kingdom is glorious and rules over all.
2. God rules in the height, almighty to save; / though hid from our sight, his presence we have; / the great congregation his triumph shall sing, / ascribing salvation to Jesus our King.
3. "Salvation to God, who sits on the throne!" / let all cry aloud, and honor the Son; / the praises of Jesus the angels proclaim, / fall down on their faces and worship the Lamb.
4. Then let us adore and give him his right: / all glory and power, all wisdom and might, / all honor and blessing with angels above / and thanks never ceasing for infinite love.